

縦寸が標準より長いお年玉切手シート

永吉 秀夫



どうということないお年玉切手シート(1961年赤べこ、1965年麦わらへび)に見えますが、どちらも標準品より縦寸が3~4ミリ長く裁断されています。標準品と印面位置を揃えて重ねてみると、下のようになります。赤べこは下側が、麦わらへびは上・下側とも拡大しています。



そもそも標準品の縦寸は1962年以前と63年以降では異なっていて、前者は90ミリ(切手3枚分)、後者は93.5ミリ(円筒状版面の周長の6分の1)となっています。前者は6シート大(横2×縦3)に仮裁断した大判シートを1段ずつ目打穿孔するのに、後者はロール紙に2列縦並びで印刷したシートを連続工程で目打穿孔(1シート分一括穿孔の全型目打)・裁断するのに都合よいサイズなのです。

何かの間違いで裁断位置がずれたのでしょうが、裁断前のシートは標準品のシートサイズに合わせて印刷されているので、紹介品のように縦寸の長いシートが発生すると、逆に短いものも製造されたはず。裁断は官封100シート分を重ねてなされたでしょうから、このようにサイズの大きいシートは、少なくとも100シート(×2列=200シート?)存在したはずです。